

第一篇 観

光



美川スキー場中央ゲレンデ

第一章 美川の風光……………三六七

第二章 名勝・旧跡

第一節 名勝……………三六八

一、御三戸嶽……………三六八

二、面河川……………三六九

三、穴神鐘乳洞……………三六九

四、美川スキー場……………三六九

第二節 旧跡……………三七一

一、岩屋寺……………三七一

二、上黒岩遺跡……………三七二

三、赤蔵カ池と矢竹……………三七二

四、山城址……………三七三

第三節 観光の将来……………三七四

第一章 美川の風光

国定公園面河溪が霊峰石鎚山の庭であれば、さしあたり美川村はその門口にあたる。この緑一色の山村に点在する観光資源はまた上浮穴郡にまたがる四国カルストとの関連も深い。とくに面河溪をはじめ柳谷村の五段高原、小田町の小田深山^{おだみやま}溪谷、さては久万町の古岩屋などの開発いかんによって大きな影響をうける。昭和三〇年に「大面河観光協会」が設立されたが、さらに広域観光開発を進めるため四三年に「上浮穴観光協会」と改められた。

かつて文化の流入を阻止していた三坂峠も今は松山、高知を結ぶ国道三三三号線の開通で旅客の目を楽しませる一風景と化した。松山から三坂を越え、久万町の中心街をすぎ久万川の溪流に沿う国道を南に下ると、これが面河川と合流するあたり、美川大橋の左側に清流を繞らせた白く輝く岩肌がそり立ち、常緑の松をいたゞく美観が人目を楽しませる。これが美川村の中央で、観光の拠点「御三戸^{みみど}の嶽^{たき}」

であり、役場の所在地でもある。

美川村は四国山脈中の山村であるため、低緯度にかゝわらず冬の寒さが厳しい。したがって降雪も多く、しばしば交通も杜絶する。この降雪を活用して山腹のスロープにスキー場を開発し、現在これが冬期の観光資源として重要な役割を演じている。

また夏の冷涼さは都市に住む人々への魅力となつている。面河川の清流を眺め、その支流直瀬川を溯れば弘法大師ゆかりの四国霊場四五番の岩屋寺がある。さらに四国カルスト大川嶺連山、高知県境に近い猿楽^{さるがく}一带は四国山脈の山なみが地形模様を見るように美しく、年々涼を求めて訪れる人の数を増している。いまその村内の風光の中から代表的ないくつかを採り上げてみよう。

第二章 名勝・旧跡

第一節 名勝

一、御三戸嶽

耳せはし河鹿うぐひす時鳥 巖谷小波

岩が大きい岩がいちめん蔦紅葉 山頭火

美川村のほゞ中央、三坂峠を源とする久万川と石鍾山から流れくだる面河川の合流点にそそり立つ「御三戸嶽」は村のシンボルとして、村民はもちろん観光客を楽しませてくれる。

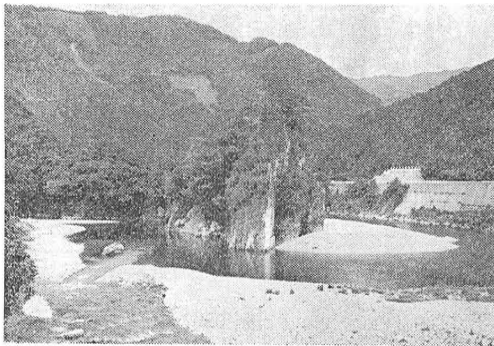
明治三六年のころ、石丸富太郎らの努力によって面河溪が広く天下に知られるようになってから、ここはその玄関口として存在価値をいちだんと高めた。高さ三七呎余の石灰岩は長い地質年代の風雪にさらされて奇岩絶壁となり、その特有の肌色と浸食の面白さに加えて岩壁にまといつく蔦、生い茂る老松古柏その他の落葉樹がよく調和の美を見

せている。太陽光線と水の色が呼応して岩肌の色が一日に七変化するといわれ、「七面鳥岩」とも呼ばれている。夏は涼を求めて訪れる若人が水面にボートを浮べ、秋の紅葉の絢爛さはすべての人を陶然とさせる。

ここはもともと民

有地であったが、この絶景を損なわぬようにとの先人の配慮から、明治三七年一月二二日に久万凶荒予備組合が買い求めて現在に至っている。自然保護、環境保全に先鞭をつけたものといえよう。

四季おりおりに訪れる文人墨客も多い。昭和四六年名勝地として愛媛県の指定を受けている。



御三戸嶽

二、面河川

日野浦の「八幡嶽」と、横山部落の下方一呎の面河川沿い一帯の名勝を指して呼ばれる「御嶽」は共にすばらしい景観である。特に「御嶽」は「面河溪の前景」ともいわれているが、この付近は山が川に迫って絶壁を作り、その岩壁は四季おりおりに変化し各種の木々が人々の目を楽しませる。春は藤、初夏は川つゝじがらんまんと咲きほこり、若葉の緑も美しい。晩秋の紅葉は岩や木に映えて一段と美しい。冬期に枝を伸した木々や岩石に降りそぐ積雪は小谷にかゝる霧氷とともに、一幅の墨絵を見るような自然の芸術である。岩をかむ激流と深い淵が連なり、アメ（ヤマメ）・イダ（イワナ）・ウナギ・アユなども多く、夏は釣り天狗にとってよい漁場でもあり、村人にも愛されている所である。

三、穴神鐘乳洞

村内に石灰岩の洞窟は大小いくつもあるが、まず代表されるのは筒城の山の中腹にある穴神鐘乳洞であろう。

横穴の総延長三〇五呎で、入口は跼くま^{せくま}ってようやくはいるくらいだが、中には数畳敷ける広い所があり、二層三層となり、至る所に鐘乳石と石筍があり千姿万容の形態をなしている。洞内には清冽な水が音立てて流れ、スケールは決して大きいとは言えないが余り知られてないだけに、自然の美観を保っている。このまゝの姿で、毀損されないように観光者に気をつけてもらいたいものである。洞穴から流れ出す水は、農業用水として利用されている。

また大字上黒岩国道三三号線の対岸にある上黒岩洞窟、日野浦には「藤社のたて穴」と呼ぶものがあるが、共に未開発である。

四、美川スキー場（大川嶺）

昭和三五年頃から愛媛大学助教授山内浩を長とする同大



穴神鐘乳洞

学探検部の調査により、東西二五坪におよぶ四国カルストが全国で紹介され、三十九年三月県立自然公園四国カルストが誕生した。

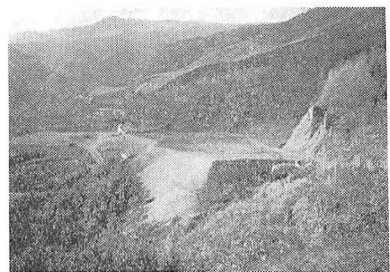
この四国カルストの中で特異な存在として知られているのが美川スキー場で昭和三五年に愛媛山岳会・国鉄バス・愛媛新聞社・県スキー連盟(当時、県スキー会)・大谷部落の協力により開発された。南国スキー場としては降雪状態も比較的恵まれており、交通の便もよい関係で関西有数のスキー場となりつつある。スキー場は美川嶺・美川平・中央ゲレンデと三ヶ所に区別され、面積約一〇〇畝、中心は

美川平と中央ゲレンデである。三六年にはスキー場の拠点として国鉄山の家が建設され、続いて美川荘(建設費二〇〇万円)、公衆便所貸スキー事務所(建設費一二〇万円)、診療所(現スキー合宿所)・松山商大・愛媛大学の山小屋、関印刷会



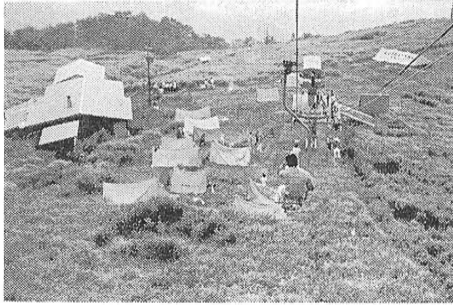
美川スキー場

社職員保養所が建てられ、観光地としての基盤がしいに整備された。昭和四〇年にスキーヤー待望のスキーリフト(六一三畝、建設費一、六〇〇万円)が完成しスキー場管理事務所も新設された。宿泊、食堂も民間経営による大谷荘、大



第三駐車場

川嶺荘、美川観光会館が完成し、またマイカーのための駐車場(現第一駐車場)も完備された。その後、スキー場まで道路が延長されたのを機に、四三年第二駐車場(建設費一六〇万円・普通車三〇〇台収容)を建設し、受け入れ体制を整えたがなお不足し、ついに四六年第三駐車場(工費二三〇万円・普通車三〇〇台収容)を建設した。しかし、年ごとに増加するスキーヤーの車は駐車場よりあふれることもある。また、駐車場よりゲレンデに通じる遊歩道(三三五〇坪・歩道整備二四〇万円)も整備され、ナイター施設・水道施設等も完備され冬期の観光地として発展している。



風景 キャンプ

美川嶺一帯にある高山植物は、学者によると高山植物の宝庫であるという。嶺一帯に群生している「つつじ」は今後大きな観光資源となるであろう。また四八年より林業構造改善事業の一環としての森林利用事業が完成

今後さらに美川嶺・美川平の本格的な開発が期待される。美川嶺を中心としたスキー場は、夏期は絶好のキャンプ場に衣替えする。谷のせまらぎと小鳥のさえずりに目をさまし、雲海を見おろしながらの日の出を拝み、また夕やみせまる頃の石鎚山の勇姿を望むと、まさに別天地に遊ぶ感が深い。年々多くのキャンパーが訪れている。
美川嶺・大川嶺・笠取山にかけての草原一帯は国営牧場として昭和四七年から工事が進められているが、完成後は

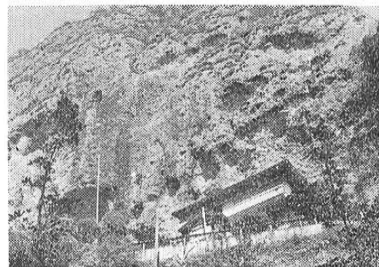
観光と畜産を併せての観光地となるであろう。

すれば、春は新緑・つつじの花道、夏は納涼、秋の紅葉、冬のスキーと四季を通じての広域観光地の拠点となるであろう。

第二節 旧跡

一、岩屋寺

岩屋寺は美川村大字七鳥にあり、久万町の古岩屋に隣接している。礫岩数峰が聳え立ち、その絶壁のいたる処に洞窟がある。礫岩峰の頂上には老松が茂り、イワヒバ・セキコク・ツタ等の植物が群生している。参道をはさむ老杉の中にたちこめる朝霧はさながら大海を望むごとくである。当寺は弘仁六年(八一五)、弘法大師の開基と伝えられ、四国霊場四



岩屋山

五番の札所として四国巡拝の遍路および信心深い善男善女の参詣者が後を絶たない。高さ数十呎におよぶ奇岩が青空に屹立するたゞずまいは、自然のつくりだす芸術の偉大さを感じさせる。原生林と礫岩峰の調和のとれた景勝は見事であり、昭和一九年に文部省から名勝地に指定され、また三九年に県立自然公園に指定されている。遍照閣が昭和三八年に建設されて夏期は研修など多くの人に利用されている。山門から本堂までの遊歩道（整備費二四六万円）は昭和四七年に整備されたが、県道から山門までの歩道も四九年に整備される計画である。現在久万町が古岩屋を中心とした開発をすすめているが、これからの施設が完成すれば岩屋寺の景観は、さらに観光資源としての価値を高めるであらう。

二、上黒岩遺跡

昭和三六年に美川村大字上黒岩ヤナセで発見された岩陰遺跡は一万二、〇〇〇年も前の縄文早期の人類遺跡として一躍有名になった。

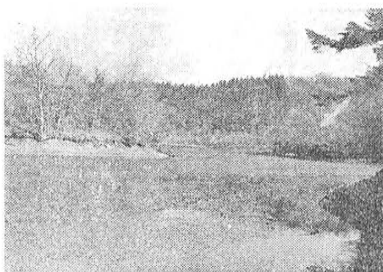
同地は国道三三三号線沿いの久万川の対岸、高さ三〇呎の

石灰岩が露出した岩陰にある。発掘調査の結果、国指定の史跡となり、さらに四八年に愛媛県の「文化の里」に指定された。出土品の数々はこれを収蔵展示する考古館が四九年七月に建造されて、一般に公開されている。（くわしくは第七篇教育・文化の項を見られたい）

三、赤蔵カ池と矢竹

スキー場を中心とする大川嶺連山と面河川を距てて対峙するのは東の高知県境に連なる猿楽一帯である。この中に伝説につつまれた赤蔵カ池がある。

この池は美川村の沢渡・二篋・筒城の山頂にあって湧水による自然の池で、水は農業用水に使われ、四国でも珍らしいジュンサイが生育している。池の周囲は雑木林で四季おりおりの変化があるが、池はつねに蒼然と不気味にしづまりか



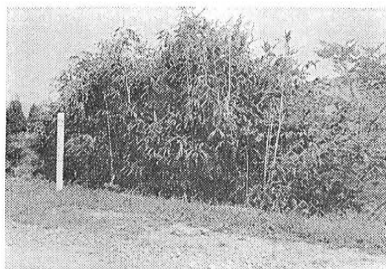
赤蔵ヶ池

えっている。古書にも「鴨住ヶ池」、「阿蔵ヶ池」または「遊ヶ池」といろいろに記されているが、源三位頼政が退治した怪獣（ぬえ）はこの池に棲み、雲に乗って京の空へ往来していたと伝える。周囲五七五畝、面積一万〇四七〇平方畝という。

この池から南東に三き下った県道の傍らに竹の群生が見られる。「矢竹」と呼ばれ頼政がぬえ退治に使用した矢の竹がこれであったと伝え、村は文化財に指定して保護育成につとめている。

矢竹の特色

- 1、笹の一種で、竹の種類ではない。
- 2、皮が竹のように落ちないでいつまでもついている。
- 3、一節から枝が左右に出る、どの枝も同じ方向に出るので扇形をしている。
- 4、葉がしのべ竹等より広くつやがよい。



矢竹の群生（二笠）

5、節と節の間隔が長く、節が小さいので矢に適している。

（植物学者八木繁一による）

池の近くに四二年からテレビの中継塔が建設され、四七年には村の観光開発計画に基づき用地の確保も出来ており、現在、富士企画株式会社が大規模な観光開発とゴルフ場を計画し、事業の促進をはかっている。

四、山城址

大川に石本城

址、有枝に高森城

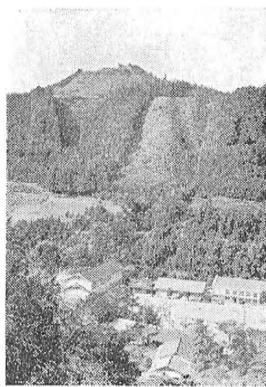
址、日野浦に銭尾

城址、西古味に鷹

森城址と呼ばれる

ものがある。これ

らはいずれも戦国



鷹森城址（山頂）

時代に土佐の長宗我部元親の侵入を防ぐための番城であった。その中心は久万の大除城主大野氏で、道後湯築城主河野氏の南の守りであった。石本城は梅木馬之介、高森城は佐伯重兵衛、銭尾城は菅新左衛門、鷹森城は越智帯刀の守

る所であったという。

(くわしくは「久万山の歴史」を見られたい)

第三節 観光の将来

青い国・四国は一つと言われている。そこには小じんまりとした観光地が多い。観光資源には恵まれているが未開発地も多い。これは四国の交通機関にその因があるのであろう。現在は道路が完備し、海はフェリー・ボート等の発達により、本州・九州からの観光客は非常に多く美川大橋を通過している。エネルギー問題で着工が延期されている瀬戸内海大橋の架橋・九四海底トンネル開通など、表石鍾スカイラインが完成すればその数は現在の数十倍となるであろうことが予想される。美川村はその日のために、積極的に特色ある観光開発を促進するとともに、広域観光開発の研究をする必要がある。これら観光客の足をいかにして美川村にとどめるかが今後の大きな問題であり、美川村発展の重要な要素でもある。そのために広域観光を進め、他の観光地との有機的なつながりを強くし、それぞれの特色を

生かした施設を充実し、共存共栄の実をあげてゆくことが重要な課題である。